昭和新山学習登山会テキスト 1　　2005,4,23 現在

ポイント１　新山沼

壮瞥川が昭和新山の隆起に伴い、堰き止められて出来た池である。活動当初は伊達と　壮瞥との村界に隆起が始まり、柳原での隆起に伴い長流（おさる）川を堰き止め、一部の科学者が「かって滝の町一帯は湖であった」と称していた様な広域の水没が懸念された。幸い隆起域が村界から九万坪に移行した事と、雪解け増水の激流で隆起した川底が削られた事で長流川の滞水は停止した。が、昭和 19(1944)年６月、隆起は字フカバ集落に至り、村役場と地域住民は隆起する大地を掘り、排水に努めたが(6 月 23 日の噴火開始迄７本の人工排水路を掘った）滞水は進み、字温泉、建部に至る 10ha 余の大きな池となった。

ポイント２　旧胆振線線路跡

毛利ハイヤー辺りから生コン工場入り口迄の現国道 453 はかっての私鉄「胆振縦貫鉄道」の線路跡である。紫明苑入り口分岐のやや南、伊達に向かって右側道路沿いに線路跡の標識が立っている。

ポイント３　旧胆振線鉄橋々脚と飛岡宅の庭木

壮瞥川に架かっていた鉄橋橋脚。国道から約 30m 程隆起。植生としてはトクサの群生に注目したい。橋脚から南に約 100m、梅の古木に至る。かって飛岡邸の庭に植えてあった木が家屋敷と共に持ち上げられたもので、昭和 40 年代末迄は花を咲かせていた。

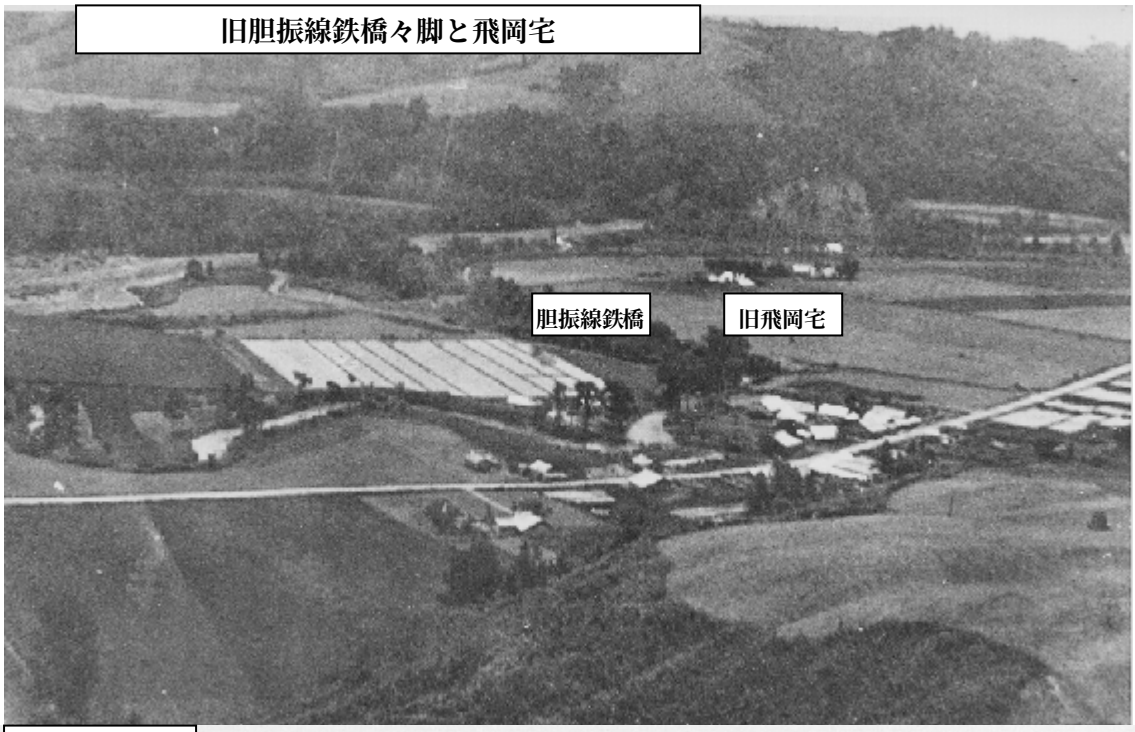
周辺に人工の積み石構造物も見られる。

【留意点】

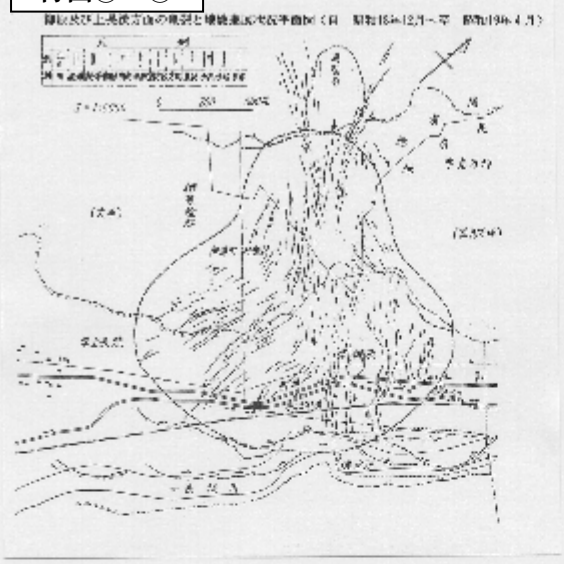
1)　今日隆起量を考える時、現在の地況に対比して判断しがちである。写真と対比すれば、現国道 453 が元の位置から 20m 弱の隆起があったと推測される。かっての壮瞥川はフカバ集落中央部では池状に澱んでいたが、今日は急流となって長流川に合流している。

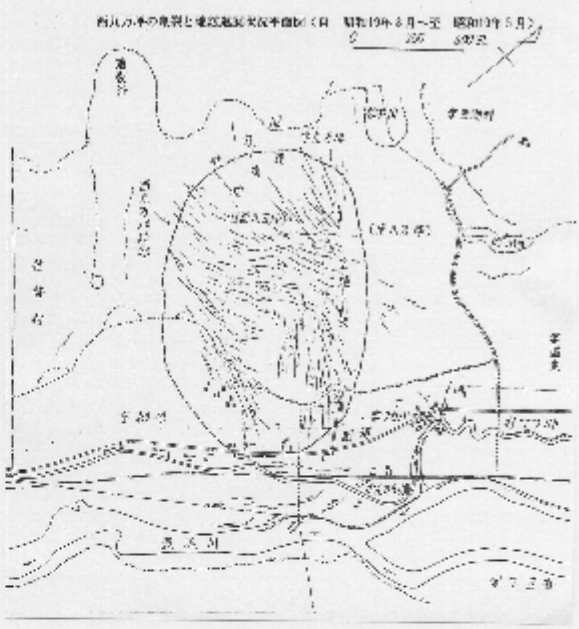
〔写真参照〕

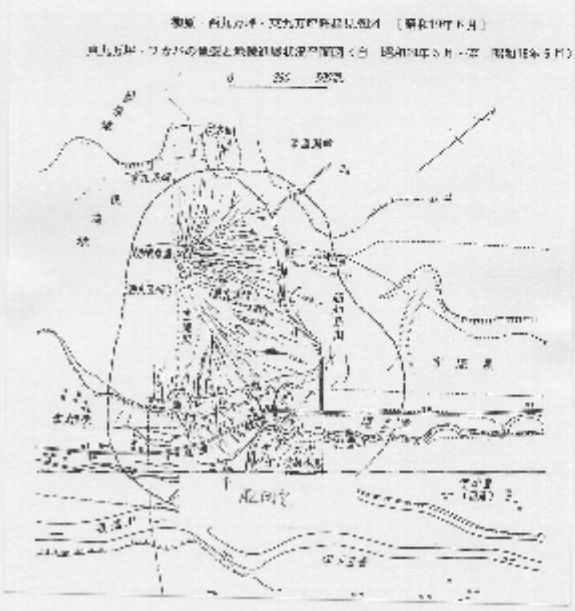
2)　一部の人工林（落葉松・トド松）を除き、植生の全ては自生のものである。
噴火に伴い一度は壊滅した植生も、自然に託しておけば見事に再生する力のあることを示している。（ポイント１～３：付図①ー④参照）

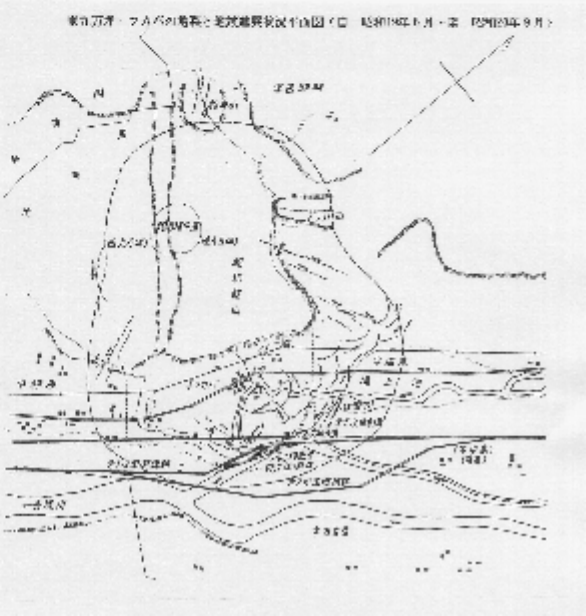


付図①－④









ポイント４　地皺山（ちしゅんざん）〔参照 1:2,500 地形図〕

地皺山という言葉は田中館・石川・三松等が専ら使用した単語で、学術用語としては認知されていないと思われる。が、昭和新山形成を考える時に興味あるポイントである。
この地形はドンコロ山から旧南登山口に至る屋根山山麓に限定されている。

熔岩ドーム

形成時上への成長から横への成長に転じた時、南面は空滝沢断層、西は松本山、北はドンコロ山に遮られ、専ら北東～東方向へ成長した。地皺山は横向き成長のフロント地形とも考えられる。尚地形図から昭和新山が３個の円形集合体の様に見える。

ポイント５　グレン谷

規制以前の入山者は右肩頂からこの窪地を見て昭和新山の火口と誤解していた。この地形はかっての空滝沢で、昭和新山ドームと西側のミニ潜在ドームの隆起に囲まれた窪地である。この窪地底からドーム頂迄約 110m。メイン・ドームの全貌及び百合根状構造や鏡面が望める。